冨岡倍雄教授を偲ぶ

中　村　平　八

冨岡倍雄先生がなくなられて，2カ月が過ぎようとしています。先生のご命日は，1998年4月15日です。桜の季節が終わり，アジサイの花の季節を迎えましたが，先生のお姿はありません。古人は言いました。「年々歳々花あい似たり，歳々年々人同じからず」。

冨岡先生は，これまで経済学者が研究対象にしてこなかった分野を，研究対象として選ばれました。すなわち，発展途上地域の研究であり，南北問題の経済学がそれであります。先生はあるシューレ（学派）に属し，通説や反通説の検証を自己の課題として，分業の一端を担えばよいという研究者ではありませんでした。言うなれば，強靭な思考力を頼りに，一人で未知の道を歩みつづける研究者でありました。先生ご自身，そのことをよく自覚しており，通常のアカデミックな専門研究者とは異なる「探検家的研究者」と自己規定しております。

それだけに先生は，経済学部での担当科目「新興国経済論」，大学院での演習科目「新興国経済論特殊研究」を講義する際，試行錯誤の連続であり，苦しいような楽しいような日々であった，と述懐しております。学生思いの先生でしたから，受講生諸君に迷惑をかけたのではとのお気持ちもあったようです。しかしながら，冨岡ゼミの出身者はみな，個性派の社会人として活躍しており，また大学院にきた諸君も，いぶし銀のような研究者になり，途上国研究の諸分野で，よい仕事をしております。

冨岡教授の研究エッセンスは何であったのでしょうか。それは《冨岡産業革命論》に集約されています。それによれば，イギリスには機械制工業を生みだす土壌，つまり産業革命の先駆者となりうる条件がありました。それは，「鉄技術の社会的普及度」（一人当たりの鉄消費量の差，一人当たりの鉄生産・加工技術者の

数の差，鉄・鉄製品の相対的価格の差，などを尺度として計測しうる量的概念）における優位であり，それは証明可能です。

近代において，この点でイギリスは抜群でした。そしてまた，ヨーロッパではフランスやドイツ，アジアでは中国・朝鮮・日本もまた，イギリスに劣るとはいえ，「鉄技術の社会的普及度」において優れていました。したがって，これらの国は，経済外的暴力にさらされないかぎり，機械制工業を相対的に順調に生みだすか導入することが可能でありました。事実フランスやドイツ，日本は，工業国への道を歩むことができたのです。

今日の途上国の大半は，近代にいたるまで，マニュファクチュアやモノカルチュアを広範に発展させ，ヨーロッパより豊かでありました。しかし，鉄や鉄製品をそれほど必要としていなかったために，「鉄技術の社会的普及度」において，相対的に劣っていました。それゆえ，19世紀から20世紀，途上国における機械制工業の導入は困難をきわめ，今日の南北問題を生むにいたったのです。広義の19世紀に，アジア・アフリカとヨーロッパとの経済的地位の逆転が起こったのです。

アジア・アフリカの途上国の貧しさは，機械制工業が提供する製品やサービスを，貨幣と引き換えに入手できないとき，発現します。今日のアジア・アフリカの貧困とは，鉄文化あるいは機械制工業に起因する貧困なのです。そこからの脱出の諸条件の究明――それが冨岡先生の学問的課題でありました。

紙幅が切れたため，先生の学問のすべてを紹介できません。それは別の機会に譲るとして，神奈川大学経済学部の途上国研究グループは，先に梶村秀樹教授（1935―89）を失い，今また冨岡倍雄教授（1929―98）を失いました。残されたスタッフや院生が，何をなすべきかは自明であります。元気をだしてゆきたいと思います。

（『神奈川大学通信』第221号，1998年7月に掲載）